

# 1 キリスト教主義教育

## 進捗状況報告

キリスト教主義教育活動、とくに直接的にキリスト教プログラムとして展開されるチャペルアワー、さらにキリスト教学講義の展開は、長年学内で蓄積されてきたノウハウが定着していることもあり、それを継続する形で実施されている。したがって毎週にわたって大学関係だけで見てもキリスト教学の必修化は徹底し、週40回近くのチャペルアワーが行われている。ただし、その効果に対する評価基準の策定については、授業出席回数やチャペル出席回数の確認にとどまり、その内容がどの程度学生たちに把握され、教育的な効果をもたらしているかについての評価方法、基準は確立されていない。

このことはすでにこれまでのキリスト教教育のあり方への評価でも指摘されているところであり、具体的な改善のための方策を第三次大学中長期計画において提案したところであるが、学長交代に伴いその中長期計画そのものが新基本構想との関連によって再検討されることになったことを踏まえ、全学院的な課題として、改めてキリスト教教育のあり方の見直しが08年度夏以後行われることが予想されている。そのなかで指摘されるのは、関西学院としての高い社会規範、共感性、他者理解をもち、つよい正義感と倫理性をもって他に仕える姿勢をもつ学生の育成こそが、ひとつの関西学院が目指すキリスト教主義による教育の具体的な成果である。とすれば改めてキリスト教学の講義内容などが、関学スタンダードとして全学的に共有され、関学が育てようとする人間像の基盤形成につらなる内容のものとしても精査され、全学的に教授されるようなキリスト教学の学科内容の見直し、そのための共有テキストの作成などが具体的な必須課題として改めて求められることになる。しかも、それをただ宗教主事個々の課題に任せられるのではなく、大学教務などとの連携のもとで全学的カリキュラムの一貫として位置づけられうるシステムとして構想されることが必要であろう。

またチャペルのあり方についても、やはり関学に在学するものにとってその意味の重要性を訴え、卒業学年まで続けてそれに出席を奨励し、その学生の努力をきちんと評価するだけのプログラム化も必要であり、それもまた宗教教育の責任者としての学部長の指導のもと、全学部的取り組みとして推進されることによって、その実効をあらしめることが期待されよう。

## 学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

キリスト教主義教育の成果を測定するに際してどのような指標をとるべきか難しい問題であるが、卒業生調査における「スクールモットーの浸透度」を参考とすれば、2000年から2005年で、これを意識する者が78%程度で変化していないにもかかわらず、スクールモットーを強く意識する者（行動の規範としたり、頻繁に意識したりする者）が13%から18%へと5ポイントも伸びていることは注目に値する。同様な結果が同調査の「大学で学んだことと経験（キリスト教科目・チャペル）」にも見られる（10.5%から16.8%の6.3ポイントアップ）。ただし、キャンパスコミュニティ調査（2004年・2006年）に示されるように、チャペルの出席とその評価には大きな変化がないので、どのような要因によるか精査が必要である。キリスト教主義学校としての本学の特長を活かすことができるよう、適正な指標を今後もさらに検討することとしたい。

## 学内第三者評価

キリスト教主義教育は本学の建学の精神を裏打ちするものであり、関西学院のすべての営みのバックボーンとなっているものである。キリスト教主義教育なしには、関西学院の存在はない。宗教の存在感が薄れている昨今の日本にあって、キリスト教主義教育を堅持することに多くの困難があることは予想されるが、逆に、今の日本の現状を見るとき、その必要性は高くなっているともいえる。今年度の進捗状況報告からは、多くの問題点が課題としてあげられている。どれも重く、解決の難しい問題であるが、創設の原点に立ち返り、解決に向けての進展を図っていくことが期待される。

なお、2007年度学内第三者評価、自己点検・評価の追加記述に関する具体的なキリスト教関連の自己点検・評価がなされていない。